

留守居

水野 仙子

『おてんきでようございますねえ』と門かどのところところで美以さんの聲がする。

岩田さんのをばさんが表に出て張り物でもしてたのだらう。茶ぶだいの脚を折って伏せて、そこらに散らかつて居た紙片かみきれを拾ひあげて、曲って居た机の前の座布團を直したが、さて私はそれから何をしていゝか一寸まごついた。

小石川まで一寸と出掛けて行つた美以さんの歸りはどうせ夕方になるのだらう。それまで私は何をしたらいゝか、本を讀まうか何か書いてみようか、それとも襦袢じゆばんの襟でもかけ直して置こうか——家の中に唯一人の私は何をしようとするそれは勝手だ。何か奇抜いたひらな惡戯をやつて、歸つて來た美以さんを吃驚させてやりたいやうな氣もするし、押入れの中でも掃除しておいて、夜になってお蒲團を出す時に『まア！』といはせるのも面白い。併しかしながら細かな御用からして置かなければならないから、私は先づ飯櫃おほちを洗つてそれを裏の四ツ目垣の竹の先にかけて、生乾なまひだった足袋を日あたりの竿さそにかけ直したりした。眉に眩しいやうな光りのみちた午後である。

私ら二人の住居すまひを訪問おとづれるとて來た湖畔の女が、道すがらそれをのぞんで

『ま、白い家が！』と詩人らしく吃驚した、代々木練兵場のテントの家々が（それには糧秣まぐさが一ぱい積まって居る）目の前の畑を越えて松林をあしらつて、からつとしたあたりに浮き出たやうに見えて居る。風こそ少しつめたいけれど、この二三日の春めいたこと。

再び家の中に戻つて、何するともなしに私は机の前に殊更着物の前あはを合あはせてきちんと座つた。暫く机に頬杖ついて、動いたあとの荒い息を納めて居ると、さつさつと屋根續きの隣りに竹を削る音が、あたりの靜かさを破らぬ程の調和をもつて、どうやら暢氣のんきさうにきこえて來る。そこには竹籠を編む若い男が一人、終日しゆうじつものも言はずに仕事をして居る。飽けば覺束おぼつかない尺八ねの音が慄おそえるやうに聞こえて來るが、折々御飯を炊きに來る母親が顔を見せる時だけものを言ふ聲が聞かれる。私は此間こゝから母子おやこの會話はなしを聞くとともになしに聞いて

知った、その縁談のことなどを想像して居たが、長い間ぼんやりして居るといふことが大好きな癖に、また一方それが非常に気が揉めてならないのが私の性分しやうぶんで、直ぐにふっと起ちあがつてそこらを見廻した咄嗟とっさ、私はふと或る仕事を思ひついて、本棚の引出しから幾切れかの餅を取り出した。黴かびかゝったと言つてそのまゝにして置いたのを、今暇にあかして削らうといふので、手近にあつた東京全圖を机の上に廣げて、其上に新聞紙を敷いて私は、早速ナイフの先でこつこつとはじめた。

氣まぐれにやり出した此仕事は、意外にも私に黴かびといふ或る色彩の美しさを教へた。白、赤、黄、緑、目に入るのはたゞこれだけであるが、肉眼に訴へない他の色もそのうちに隠れて居るのだらう。赤が一番深く點ほしになつて植はつてあるのを、それはナイフの先で抉ぐるやうにする。

するうちに手先に對する注意はやうやう薄らいで、幽かに指の先に疲勞つかれを感じながら、散れ散れに考へは考へを追い、嘗かつての折々の印象などが泛び出て来る。手の先は猶動いて居る。

あの時あの折のあの人の態度、あの言葉、などゝ考へてるかと思ふと、ある時ある場合に言つた自分の言葉や行爲おこなひを、も一度頭の中で繰りかへして見る。かと思ふと人の顔がちらちらと通り過ぎて行く――

黒い上着を着て居た。二つある小さな窓の貯金爲替受付口と書いた一つから、黙つて爲替券を差し出すと、それを受取つて小爲替ならば消印をよくよく調べ、もしくは通帳表の字と一字一字見くらべて、さて一點てんも間違へないところで引出しを開ける。それが紙幣きつだったならばたとひ一枚でも、海綿をつまんで幾度も幾度も數へて見て、また思ひ切り悪るさうに數へて見る。

いつでもあつけにとられて眺める、いつもあの郵便局の人の、眉の迫つた神経質らしいあの顔！

あゝあの女がまた！ 厭な顔、厭な顔、なんといふまア！ 何氣なく歩いて居た足がかうして襲はれるやうに立ち止る時がある。屯たむろして居る幾條いくすぢもの煤煙をのぞむたびに、此處から都會といふ感じがいつも新にする。府下から市中へと志す時にぶつかるのがこの新

宿の停車場である。品川行と掲げて去った列車の煤烟けむりが濛々もつもつとあがつて来て線路に架した橋に當つてわれて騰る。其煤烟の中にかすむ人が再びはつきりして來ると、あゝまた其處に例の女！

風の日だった。初めて其女の顔を見たのは、やっぱり美以さんと一緒だった。

『何て厭な顔でせう！』

『何て厭な顔でせう！』

と二人は一緒に言った。

青くて青くもない、黄色くて黄色くもないやうな顔色、一寸見れば十七八とも見える。或る日は廿六七に見えた。腫むくんだやうな、それでゝ赤い唇を動かして人の顔さへ見ればぼくぼくと首を下げる。へっそりとした汚い羽織を着て、胸には南無妙法蓮華經と書いた袋がかゝつて居る。杖にのしかゝるやうに道行く人の顔を覗き込むけれども、人は大抵ちらと一瞥を與へたまゝでさっさと過ぎる――

私は此頃とこる嫌はずその顔が時々目先にちらついて困る。

くうーんと青梅街道口に中野行の電車がとまった。四五人の人が降りる。待つて居た二人が乗る。車掌の笛がピーと鳴るとまたぼうつと動き出す。我足の下でしゅうと昌平橋行のが擦れ違つた。と踏切りの番人が、車のついた柵をずうーと開けて行く。兩側に溜りに溜つた人は、我先にと荷車人力車馬車肥車しえくろま、女男子供大人、ぞろぞろと入り交つて線路を越える。後れ馳ばせに駆かけつけた小僧が通り切らぬうちに、番人はまた柵を引きはじめた。新宿電車の終點の方から來た魚屋が一人荷を擔かいだまゝそこに行きつまる。子供の手をひいた女中が來て柵にとまった。がらがらと勢ひよく角筈の方から驅け付けた人力車くるまがまたとまる。車の上の中折の人は腕組みをして居る。はらりはらりと一人二人づゝ來て皆線路電車が通つて柵がひかれると、またごちゃごちゃと、入り亂れる――。

傍ワラシチの架橋の上に立つて、それがたわいもなく面白く眺められたことなぞも思ひ出した。

私は間もなく仕事に飽きた。

ナイフを握つた指が痛くなって、首から右の腕へかけて非常な重さを感じる。

削った黴びが汚く目の前にうづ高くなってるのを見ると、私はナイフを投げ出して、そして肩をあげて首の運轉を試みた。

「水野仙子全集」第二卷より

初出：「女子文壇」明治四十三年四月

テキスト入力：小林 徹

公開：平成二十九年五月十六日